

# 地中海

MARE MEDITERRANEUM

2016.12



平成28年12月1日発行(毎月1回1日発行)第64巻第12号

No.703

## 創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の鄉愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生史的なものだ。別ないかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しました北上した、すべての未開なものと同化してきただ大きな力、——それをホメロス以来ビカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ氣持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。



## 手術台の鯉

藤森 巳行

昭和十八年生まれ。  
銀座グループ所属。  
歌集に『無冠集』がある。

十二キロ十三キロと重くなる孫を抱きてヘルニアになる

孫抱いてヘルニアなつたと医師に言ふ聞いてた看護師「クスリ」と笑ふ  
入院の不安を消さむと祈りたり諸天善神我を護れと

ヘルニアを手術するとは言ひ難く皆には内緒で入院をする

医師語る手術のリスクを妻と聞くこれも大事な儀式のひとつ

「心配を掛けますまない」妻に言ふ「あなたのことなど心配してない」

強がりの言葉の中にも夫思ふ心が少し見えて嬉しき

ホテルより安いと思ひぬ四人部屋差額ベッドは一千円也

手術前聞き取りにきた看護師は最後に何故か信仰を問ふ

テレビでしか見たことのない手術室妻に送られ入りゆくなり

医者の手に託す他なし患者我手術台の鯉になりたり

手術台は意外に狭し手と足を括り付けられ準備完了

注射されマスクを受けた直ぐ後に意識なくなる全身麻酔

「お腹はきれいでした」と看護師言ふ「さうさ私は腹黒くない」

手術終へ部屋に戻れば妻は直ぐ「それちやあね」と帰りゆくなり

美しき白衣の天使の看護でも長くは世話になりたくはなし

看護師も昔は白衣の天使なり制服変はりピンク衣えの天使

健康であれば短歌は下手で良い言つてた我が入院をする

入院をチャンスと捉へ良い歌を作らむとする痛みに耐へて

健やかに過ごせる日日のありがたさ教へてくれた入院五日

# 作品 A

白子れい

クラス会

・洛

散り敷けるさくらの花の絨毯をふみしめつづく高瀬川沿い  
古稀の生徒等に呼びだされてのクラス会角倉了以の庭に歴史のにおう  
つきつきと近況報告なす老いのふとした仕ぐさに少年の影  
外見は大きく変わるもふと洩らす笑顔のかけに少女のころが  
古稀の生徒等クラス会をと集いきて吾の米寿を祝いてくるる  
ぱつぱつり憶い出紡ぐ語らいにわが青春の風が過れる  
ふたたびを通ることなき道をゆく一本の道人生のみち

萩

葉子

ラリック

・銀

橋本曠子

悼む

・伴

文月の暑き日に受く、友どちの歿くなりしとふ 哀しい知らせを  
消息をきかずに過ぎし 幾年を かへりみてしばし 言葉も出でず  
活発に 同窓生の先に立ち 事を運べる人でありしが  
日の伴の研修旅行も数多く 東北、沖縄俱にたのしむ  
遙空の学を教はり 週三度 近江先生に難きし日々あり  
お酒好き ビールのコップに目を細め おいしさうに飲み干したり  
学び舎に机並べし杳き日のセーラー服姿 今も頬ち来る  
ぱぱり ょうこ

かつて母

・鹿

赤組の大きな旗ふる副団長顔ひきしめて孫五年生  
ラリックの四人の女神に集まりて晚秋の半日友と過ごしたり  
緑道の水辺にひらり舞いおりし白さきの孤独誰も知らない  
娘の半てん羽織りて未明の歌作り落葉が走る風が走る  
新幹線ありても遠しふるさとは「雪の古川」とうたわれし街  
薄氷を踏みて遊びし児童期の氷のきしむ音遠ざかる  
暖かくなつたら余おうの約束はいつになるのかまた寒くなる

浜 谷 久 子 落としもの

・地

雨蛙捕まえられて忘れられバケツの底から解放される日  
雨溜めのバケツにあまたのオタマジャクシ苗植えどきを占有する水  
知らぬ間を孵化して庭木を右往左往かまきりの子の斧のやわらか  
木蓮の若葉をもれくる空の青かまきりの子が照らされてる  
落としものいつもしもしている今日は母の煮尼布の味付け思い出せない  
真夏日となる日計報の続く日を熱出すおさなの命が赤い  
二時間草取りをして昼までをのそりと過ごして夕暮れが来る

浜 本 美 美

花盜人

・夢

石臼に溜めたる水に空映り落花一輪しずかに置きぬ  
公園の連翹たおりて帰るみち花盗人の心かくして  
人気なき園のれんきよう身丈越ゆ誰に見せんと花美しき  
雪桜しろじろ咲きて春深し今日より希望の花となさんよ  
昭和ひと桁体にしみ込む親の教え「他人さまには迷惑かけるな」  
日捲りの昨日を千切りて手の中に丸めまるめてああ捨てられず  
葉ばたんの芯たちのびる日々にして心は意外と沈静している

檜垣 美保子

雨

・暁

人の居ぬ真夜中に歩く願望をいだくこと立つ鉄塔数基  
カルミアの花まだ咲かぬ繁みあり百舌も鳩も啼かず出で入る  
吹きあがる桜はなびら風やめばしづかに地上にかえされている  
かなしみの胞子はやぬちにただよえり畳拭く朝雨ふりづく  
六月の夜の木立は雨にぬれほたるのひかりをやすませており  
段々の田のなかほどに家の灯のひとつがともり螢火の舞う  
かさなりてみゆるふたつの螢火がふわり流れて川上へとぶ

福 田 康 子 雪よぶ雲

・今

渡良瀬の風が触るよはるかまで田毎に変はる色まばゆくて  
明けたれば琵琶湖の波の注ぎきて矢倉川しづかにゆるる水面よ  
三方五湖水をつなぎてひらく路音を落として舟すすみゆく  
熊川の宿はぼんやり休み明け雪よぶ雲のみ流れゆくなり  
幾筋も崩れし沢に雪のせてあかときを染む神の山あり  
輝きて実り点せる柚子の木のぬくもりなほも空家庭に  
枯れし野をおぼろに満たす花の色梅林残し人は去りたり

藤 川 和 子 青葉菟

・眉

焰と燃ゆるアロエの花穂群れ立ちて戦後七十年はや暮れむとす  
黒潮の岬の碑「寅彦」の自死哀しめり昭和のをはり  
あさき眠り覚めて点けたる深夜テレビ世界の名峰ズームアップに  
再現せる八十年経し二二六事件雪積む官邸銃声ひびく  
出水川渦流となれ眼交ひは蕪村の名句、蕪村の俳画  
ホッホーと青葉菟鳴くは空耳か森は伐られて幾十年か  
屋敷うち鳥柄杓の仏焰芭妖しかりしよはんげしやうのころ

藤 田 美 智 子 ののちゃん

・新

選びたる絵本手に手に寄り来たる幼き児らの匂ひを抱く  
絵本のありかを尋ねる児らに答へつつ優しき声の持ち主となる  
またひとつ桃烟消ゆ残されし切り株を冬の雨が撫でる  
さ緑のよもぎを摘むか摘まないかいつまで続くてんびんばかり  
「寂しい」の対義語は何満開となりて桜の間に真白し  
椿葉小の校庭にボール転がれりあれも取りに戻りては来ず  
「のちやん」のひとコマと同じ大きさに汚染水漏れが報じられる

船田清子

霧に捲かる

・天

松永智子

きさらぎ

・嵐

紀の国の十月半ばは野も山もさきはひ色の耀ひに満つ  
霜月の終りを一つこぼろぎの限りとばかり頻鳴く真昼  
陽の色の金柑の肩へ歯を立つやシユワーと溢る待春の香の  
怠れば母のかたみの白椿なきままで十二回忌  
白き花上枝に保つは朴ならむ淨土の花めき霧に捲かるる  
ゆくりなく逢ひたる雨後の時計草凜々たるを君に見せまし  
キスしたし冷たき頬へ乾きたるわが眼に満ちくる熱きを注ぎ

牧雄彦

遠賀川

・大

三浦好博

ボランティア

・銚

向日葵のしみみに咲きて明るかり月のなき夜は淋しきるかも  
真つ二つに切られし断錆それぞれが我が草刈機の傍にて動く  
脱走に懸破ることヨドガワの雁葉揃めの枝を伐りゐる  
つるみ居る車道の蟬をつるむまま植ゑ込みの中にそつと移しぬ  
大方は金を貰ひし人夫よと思ひるるらむそれもまたよし  
移り行く季節と共に生きてゐる祈る形に縋る空蝉  
散りやまぬ枯葉よ風とわれの亡き後も明るきほのほをともせ

松浦楨子

一夜城

・羊

宮本靖彦

藤の杖

・凌

二十日間の猛暑ぐるは颶風の伴ひし雨沛然と降る

九月五日尚灼きつくす日のありて公園掃除の足のすすます

雨戸すこしこしこしこ開くれば朝の虫の声冷氣と入り来朝寝たのしむ  
呼び名よき月見橋にも風立ちて六甲山に黄金の雲伸ぶ  
娘の棲みし部屋のボスターそのままに我は背伸びしテレビ体操

父に購ひし握り手太き藤の杖半世紀経て散步に試す  
志貴皇子詠ひし垂水の丘の歌ゆかりの社に秋風の吹く

### 三好聖三　蛙

・伊

はすかいに飛行機雲が伸びてゆく涙ぐましき冬の青空  
カンヴァスの路地のひとりを消してゆく先ずは不出来な男のおもて  
机の上の旅を重ねてアデンまで仏人二人が翔る街まで  
交尾する蛙がわが家を取り囲む花冷えのまた雨の一日  
物よりもおよそ粗末に捨てられるヒトあり人の亡骸がある  
貧困はさらに深みへ落ちてゆくトリクルダウンの嘘を仰ぎつ  
日暮れまで無言で過ごす日々の今日硝子戸に群れるカメムシ

### 御代田澄江　想ひ種

・茨

硬質の磨かれし言葉今も尚わが魂を魅了しやまぬ  
向かひ家の瓦に照りて渡りゆく十三夜亡夫も眺め居まさむ  
何読んでるの行列と行列式だよ在りし日の夫との会話思ひ出だしぬ  
徹子のへや時に楽しむ人話題装置背景そしてファッショソ  
枯れゆける庭の寂しも霜枯れの小草抜きつつ来し方想ふ  
顔にふはり雪虫かかる誰の使者姪乳癌にてこの世を去りぬ  
第一回全国大会に出でし年昭和三十八年亡夫の郷里仙台松島

### もとむらしげと

体育祭

・そ

校庭に笑顔の花咲くごとし六百人が踊る「よさこい」

ゴール前並ばれ焦り転びたるその悔しさを糧としてゆけ

でこぼこの背がリズミカルに揺れてゆくムカデ競走君らは凄い

僕もつ手が震えれば「会長」の声飛びにけりまた持ち直す

女生徒の手をとりスキップで出でゆきぬリードする手に心ぬだねて

軽やかな子らにつられて右往左往フォークダンスはアップテンポで

生徒らのうたう校歌は乱れつついつしか一つの声に和しゆく

寒空の目線の果たて四保山が師走の宵を照らすつづら灯

子を連れて来たるが子を連れ去りゆけり年末年始は波のことくに

月命日近づくあれば海岸に人固まりて土起こしおり

オリンピックに沸き立つ見れば戦いて人勝つために命の限り

敬老の席に坐るは何回ぞ「津軽　八戸　大湊」

にんにくを食しいのちを保てよと勧むるあれど忘憂ありて

すんだ餅、新米ご飯、あま柿を供え仏と対話している

### 山下雅子　凡人

・福

七草のみどりの芽ゆる粥ぬくく癒えたる五臓六腑をめぐる  
M.R.I.の中に対き合うわがいのち平均寿命知らぬ間に越ゆ  
これという喜怒哀樂にかかわらぬ涙がぼとりドライアイより  
ま青なるガスの焰に湯を沸かす朝の安堵に今日が始まる  
量冠の月の誘う訣れあり卯月のおぼろおぼろに消えぬ  
わが町の露天風呂より打ち仰ぐ方形の間　月のぼりたり  
沖縄の珊瑚は苦しき悲鳴上ぐ凡人なれば聴く耳もてり

### 横田敏子　菩薩の絵

菩薩の絵

・福

復興の先触れとなれ　正月に紅梅はやもひらき初めたり  
しんしんと冷えて夜空は星の海いざ潛き出さんオリオン座まで  
少女期を薬沓履きて学校へ通いし日ありふる里の冬  
億万の灯ひかり点れば浮き上がり光の森となる大都会  
焦がれおりし棟方志功の「菩薩の絵」夫の九年目の命日に届く  
ふくよかなる菩薩の面差し拝すれば穩くなりて心安らぐ  
朝夕に菩薩に声を掛けおりて独り居ふたりとなりゆく思い

### 八乙女由朗　忘憂

・柴

## 吉内尚彦

裸が防ぐ

・浜

## 飯田勤

戦への道

・む

琵琶湖より大きい心のみずうみを抱きたしと立つ若草の岸  
 この郷は琵琶湖八珍裏八珍の湖魚を欠かさず食卓開む  
 蔽陰にひそと一輪紅椿花もひと重にうぐいすを待つ  
 ゆうらりと琵琶湖に浮かぶ水鳥も水面の下の足の忙しき  
 紅の香のほのと湖北に春を呼ぶ齡四百年の盆梅「不老」  
 大輪の花はしほむもカスミソウ花瓶に残り星をちりばむ  
 三世帯同居となりぬ夫々の生活の波を裸が防ぐ

## 吉永惟昭

妻の被爆日

・熊

水仙の一輪テレビの脇に活く逝く年来る年孤独が好きだ  
 鏡雲立ち消えぬまま昏れてゆく一つ超えたり父の齢を  
 仮枕避難シートに添寝とは一緒に起とう大根の花  
 いただきし物ばっかりで生きていた震災よりの三旬がほど  
 ヒロシマがリオのサンバに呑まれゆくそれでいいのだ妻はヒバクシャ  
 人類の矛盾の極みキノコ雲あの色・形妻の被爆日  
 被爆妻黙せしがまま色褪せし茜蜻蛉と渉る夏川

## 朝井恭子

季の移り

・森

## 磯田ひさ子

とりがなく

・森

体力の続く限りは自力だと庭木六本手入れにはげむ  
 戰争のさ中に育ちて老いし今いくさへの道死しても許さず  
 菜の花は今を盛りと咲き競ひ道行くわれに春を告げをり  
 ひとつせの世話にこたへて盆栽のさつきの花は今盛りなり  
 烟に沿ふ道に見つけしれんげ草故郷の田んぼのふと浮かびくる  
 棚を這ふ苦瓜先を争ひて場所とるごとく蔓伸ばしゆく  
 涡流がドアを破りて足弱き人々襲ひしニユース痛まし

## 石橋美年子

自選歌

・華

ふるさとは何處と思わんこの庭に花水木咲く四半世紀を  
 ルビナスの花咲かせたきを網囲う鹿に食わすな人はエゴなり  
 気をつけてお帰りなさいは声のみに蕎麦屋のマダムの新盆の夏  
 マーラーの巨人をききつつ歩み来たる穢しき冬の日 メメントモリ  
 サンサーンスは長生きせしと名解説吉田秀和の声在りし日のラジオ  
 飼染みたる作家の死去にとり出だす購いし本の出会いの日のこと  
 ころころところころと溺き水の小寒大寒春へのリズム

池の面に漂っている桜紅葉花より紅く花より軽し  
 年を越え咲き継ぎきたる山茶花の終の一花に春の雨降る  
 野すみれに足を止めたる吾を見上げ犬は散歩の先を促す  
 鬼く我も曳かるる犬も若からず老いの散歩は足の向くまま  
 初夏の窓辺に咲ける白き海芋己を守る容かたちに丸む  
 「爪ばかりのびる」と嘆きいし母の歳越え独り夜の爪切る  
 季過ぎしあじさいの花の寂び色をわが心處のいろと思えり  
 老頭おじがし、老冠おいかんと辞書を繰る老ゆるものなかなか悪くはあらず

市原志郎

・萬

奥田清和

宇宙塵

・大

切り花にする程水仙の花咲きぬ今年の庭はにぎやかにして

校庭の桜散る下車椅子止めて今年の花見はおわる

人は皆目的の方へ歩いている足なえのわれはそれを見ている  
たずね人の放送通る夕つ方ベッドに横たわりわれも独りぞ  
悲し悲しボタン一つをとめるのもわれの生きてる時間の一つ  
ほんの少し体重ふえてきたことを喜ぶべしと人は言うなり

西行忌安吾忌多喜一忌茂吉忌とさらに利休忌わが誕生日

市原 やよひ

孫

・萬

入試の朝おまじないよと姉の背に字を書きポンと押す第二人

今日ばかりは姉を励ます二人なり笑顔と笑顔入試の朝に

ともかくも元気に出掛けたそれのみに安堵している我ら祖父母は

入学式一つ続けり何もかも輝きて見ゆ男の子女の子

新しき詰襟少し大きくて子に重なれば母に戻りぬ

制服のデザイン古しと言いながらスカートひらり舞う入学式

小中高それぞれの時間にそれが出て行く四月の朝あたらしき

上田吟子

声をあぐ

・鳩

ぐんぐんと挽ふ竹が声をあぐ台風近づくおぼやまと夜

台風十六号迫りくる盆地雨つよくうす暗かりき雲を見上げる

今秋は例年なく雨多し稻作農家の心情しのぶ

敬老の日孫貴弘の心づくしのショートケーキに家族ほほ笑む

手でむきし小いも供へし月見の夜孫の誕生待ちわびし祖母

三年目にやつと孫が生まれしと祖母は喜び仏壇に向かふ

灯をひとつ消して虫の音近づきぬ暗い木陰に耳をすまして

奥田陽子

若き声

・羊

雨中に声を張りいる演説の若き傷みを伝えたりぬ

青年の声の清しさいつか遠く聞きし日ありて雨降りそぞぐ

怒る事すくなくなりし若者らつめたき夏の雨に濡れゆく

プラカード黙し掲げるひとりあり多数の脚の行き交う駅に

一票の死票となるも厭わじと校庭ひろき空を見あげる

子らあきて住まわん家か頻発のテロを伝えてさむき空なり

冬みかん金柑の黄の照り映えて庭に立ちおり老いたるひとり

小野雅子

わたし

・羊

覆ひとれ塗り直されし鉄塔が空の色まで新しくする

ブランコもひとりで滑れるやうになり陽の匂い髪にまとひて帰る

偶数と火、木、土曜は似た感じわたしは月、水、金と奇数を好む

八百屋お七ほどの覚悟もあらずして少年法にかくれむとする

映像に見るはるかなる国の町手紙を出せば届くだよね

友逝きて暑中見舞が来なくなり給入りかもめー一枚あまる

わたしには何することも出来ないが超少子化の特集を読む

## 柏原宗一 時の流れを

・羊

## 國井節子 昭和の日

・春

神よりも原始的な存在は時の流れをよく見よと言ふ  
 遠目にし見ゆる山肌一枚岩は地層に横たむ隆起とか知る  
 切り立つた粘板岩も水を含むとやがて凍りつきぼつかり裂けると  
 細目にし空のあかりをながむるに蒼きはまれる空間がある  
 清朝の書物にありとふ玉山はかの記録にありと確かめられけり  
 あるままのかたちなるなり金木犀ことしは咲けりきはだちのまま  
 あるままのかたちにはしてけさの雨しづやかにふるしづやかにふる

## 菊岡栄子

P.S.P.

・鶴

血みどろの上着を見ては局員の親切身にしむ救急車呼びぬ  
 サイレンをならす音して運ばる友の息子の勤める病院  
 病名を告げればショックと息子は漏らす私もとショックを受ける  
 薬無く治療法ない難病のP.S.P.に生きよと医師は  
 大声を出して泣きたいこの夜は枕に顔を押し当てて泣く  
 難病の車椅子押され移動する自由はいいな歩ける自由  
 これがまあ最後かと思う同窓会夫に付き添い頼みて出席

## 草刈十郎

山の日

・世

無人駅に登山姿でにぎやかに人ら集へり山の日のけふ  
 溪流の流れの音をすすることわれら三人する心太  
 学生服とセーラー服で投票し日本の未来どう変へるのか  
 幼子のしやがみ込み見る蟻の道この道どこまで興味津津  
 波しぶきのきらめきのこと土用波と遊ぶ子どもの声響くなり  
 廃駅の名も忘れられ幾年ぞあたり一面草茂るなり  
 しばらくはひとりの世界とおもむろに日傘をさして歩む貴婦人

## 河野繁子

野

・雁

水張田に風の足跡過ぐるみせゆきて戻らぬ傷みは曳かず  
 なまめける気が肌に触れ五月閑ぼたる飛び初む灯の二つ三つ  
 和名抄に食品として載る梅のかつても酸ゆきか一粒拾う  
 舞いおりて抜き足差し足蜘蛛をとる青驚窓のわれに気づかず  
 胃袋にお玉杓子をぶよぶよとつめて飛び立つ驚よろめかず  
 哀しみを超えたる場所より強さ増す心のしなり置き忘れたり  
 ひとの倍努力の末の人並と長きなりわいこぶし咲く山

春の雨はなを散らしてひと筋のうすくれなるの帶を織りあぐ  
 新緑のひかりあふる昭和の日すこやかにして八十の路ゆく  
 ルーマニアの留学生のロレさんと新年会の柏汁をつくる  
 いかるがの塔のまほりのコスモス田老いたる二人の影ひき歩く  
 夕焼けの置きみやげかも鳥瓜あまたの朱実を繋ぎ止めあり  
 飛鳥なるキトラ古墳の壁面にゆくしく描かる星座と四神  
 薬師寺の塔を見放くる丘に住み寺の鐘とき半世紀すぐ

## 小泉泰清

灰色の月

・う

# 小西美智子

緑道

・大

# 近藤栄昭

ハラスメント

・福

「九条」が唯一誇れるものだった戦後のみじめな飢えた子供に  
右前方辺野古の表示見しままにあられ降りたる名護を過ぎゆく  
すき透る路のみどりの筋をとる厨に春の香が立ち初めぬ  
黄の花を散らすまもなくあおき実をひいらぎ南天の自在なるさま  
咲きさかるおおしま躊躇の花のいろ白きわまりて青白く見ゆ  
四照花の苞しろじると亡き人の浮かびくるなり林の奥に  
金糸梅の黄の花咲ける緑道にわかれを告げて人は去りゆく

## 小林能子

旅人の木

・羊

「お参りがよくできました」お内の方の励ましありてわれらの歳月  
墓を洗ひしづく拭ひゆく子のしぐさ見てされば日は山にかたむく  
タマリンドの古莢の散る裏通り眺むるしばし友を待つ刻  
旅人の木を印にそこまでの散歩 犬たちに声をかけつ  
東北ユース一〇五人と老ビアニスト競演やがてひとつに響もす  
忘れない 風化させまい 悲しくも優しく奏で朗誦に沿ふ  
詠む時間われにもわづかに残されて人とひとつのつながりの中

## 小山宣子

狐花

・詩

こぼるぎの声ともに聴く稚げな介護士の白き腕に触れつ  
窓よりの狭き視界に彼岸花ひと群れ赤く季を知らざる  
里山に夢はまろべり母の眼をのがれて狐花摘みし

臥して見る山の秋色深まりぬしみじみ恋ほし浮世の友ら  
介護士ら揃ひの青き衣裳にて「うらじや」を踊る今宵は祭  
唄らの唱ふ昭和の歌謡曲、憂ひなき声に午後の哀愁  
窓掛を透きて差し込む朝光にふと幸せを錯覚す

## 坂上直美

如月の雲

・信

モニターにうつしだされし動脈瘤きけばにはかに己いとほし  
ゆきわたる造影剤と知る熱さ検査の脳の何処めぐるや  
いちにんの生きてゆくこと消ゆること密かなるかな咽をよこして  
住みなれし家いつるとき手術への覚悟はきまるきつと帰らむ  
右足はうごかせません看護師の言葉いくたび耳にまどろむ  
モニターの音にかこまれ過こす夜目をさましては生きをたしかむ  
ひんやりと人をらぬ部屋冷えてをりガスストーブのスイッチをおす

## 坂上直美

新しき生活

・天

望みなしいや望みありこの世界懶やけくあれ青天の下  
望みあり新しき年來たりけり晴れて風なく穏しき日なり  
故郷は梅の盛りとなりぬへし風よ運へよ遠き香を  
二十年を過ぎて帰れる故郷の街は変われば風は変わらず  
雨の日の高層階のマンションの一室にいる私は魚  
吾が夫はハイビスカスを購えり高層階の土なき家に  
来世また人と生まれて酒を飲み花を眺めて歌をつくらん

坂出裕子

川

・洛

佐藤道子

老い

・甲

お天気がよくておふとん干せましたさやかだけど今日のしあはせ  
すいと来て川面かすめて飛ぶ鳥のかげうつるへる波のはざまに  
いつまでも生きててよと子が言へる生きて役立つことまだあるか  
枝を切り草を刈りつつ生きものの生きゆくからすこしいただく  
ゆつたりと水は流れて川の面に映すことなしひとのこころを  
遠くまで飛んで行けたかタンボボの綿毛のつぼの茎が揺れをり  
秋の日のひかりやさしき水の面に吸ひ込まれゆく心すなほに

佐久間辰

・湾

椎名恒治

・橋

歌作り作り続けて七十年漸くここに師の歳を超ゆ  
死を思う弱きこの明け暮れに今まで思う師の壮絶を  
師の逝きてはや十七年夫人は四年、われの空洞は深まるばかり  
今は既に行くこともなき世田谷赤堤ただに虚しき地名となりて  
手のひらに掬いし水は青空をわれに引き寄せやがて零れぬ  
薄くとも小さくともよしわれという影が欲しいよ生きて来た影が  
蝦夷熊襲と皇国史鏡が蔑みし東北人とはそして私とは

佐久間すゑ子

七首

・湾

鈴木結志

・福

また、友がよそのお国に行きました。思い出もみんな持つて  
如意輪觀音のように片手を頬に添えてみる。不安が消えそうで  
子も孫も帰つてしまつたお正月。また二人ねとふたり  
日々の空に向かうといつも思つてある。父が居て母が居て  
こんな生き方でよかつたのだろうか。丹念に眼鏡を拭きつつ思う  
ひとときの若さが甦ることもあるうか、小面を着けて舞つてもみたい  
あれは侵略だったのか。戦場に散つた若者達はみな純粹だった

幾度も寒き廁に立つ夫を支へゆく夜半老々介護  
着せ替へて添ひゆく夫のある幸をしみじみ思ふ齡重ねて  
故郷の友はも旅に出ぬと言ふ我も籠り居手紙のみなる  
亡き友の賜ひし温きこの肌着縫ひをれば面影に顎つ  
電話にて元気に話す友なれど会ふこともなく幾年を経る  
友は皆昔の友になりはてぬ思ひ出のみはそのままにして  
故里を遠く離れて住み着きぬ子の故里となれるこの街

日本芙蓉アメリカ芙蓉咲き出でて醉芙蓉はあと一月先か  
アガパンサスの花終りたる茎の先ゆれてをり球ふくらみて  
さまざまに言はれつ結局はその名記憶されゆき當選したり  
三日過ぎてまだ看板に並びたる笑顔真顔雨に濡れたり  
ひしめきて茂る桜の梢占め朝明より憂し憂しと蝉のこゑ  
碑文谷の池相模湖のほとりあやすやすと命を尊ぶ  
上水の標識の杭抱ぐこと蟬殻ひとつ今朝飛びたちたりや  
南天を活けて昼にとどくほど部屋を飾りて礼者を迎う  
御題香炷けば仏の袂分けざしきわらしが出でくる思い  
張る暗る墾る春の語源をたずさえて佐保姫うらら履端愛で来ぬ  
「感」老齢に伏す故事ひとの世の習いと言えど思ひわびしむ  
野菜苑の供花のしづくに裳裾ぬれくなどの神のほほ笑みたもう  
歳重ね「彭祖の寿」得る趣に無為の躍動筆致に起こす  
卒寿とはいよよ嘉をみがくとき恙無くして己がうた詠む

墨吸いて三キログラムの大筆を揮いて渾身の大文字を書く  
腰を入れ氣合を込めて大字書くたちまちに立つ強き墨の香  
大筆の墨が四方に散り行けば瞬時に紙の白がせばまる  
一字をも誤記許されぬ質状を余寒の中に身を縮めて書く  
確認を重ねて書けど誤記をする賞状を書くにも吾は老いしか  
寒き手に寄付者名簿を書きながら境内に聞く年明けの鐘  
書を見んと訪日する者一人なしグローバルな作を我は目指さん

## 関 根 榮 子

鎌倉街道

・ 埼

十月にはやも咲き出す椿にて木偏に秋と書きたきものか

「下萌え」は和菓子にもあり枯野行き春のきさしを探し始めつ  
紋付き鳥と昔呼びいしジョウビタキ庭に飛来す今年の幸よ  
賽銭の四十五円を入れ拝む始終御縁がありますよう  
この地にも残る鎌倉街道を探し当て歩み行く土の感触  
三叉路の一つは怖い迷い道子供の頃に祖母に聞きしよ  
浮世絵の白雨ならよろしきれども篠付く雨に足止めの駅

## 関 根 和 美

道 を

・ 埼

天空ゆ白くひと筋降る雲の啓示に打たれしばしうごけず

キリシタン史十五年の旅の果てふたたび招く野の声のする

混沌の意識のなかをよせ来しは口述筆記のシスターの文

なつかしき丘にて詠みし句を遺し立ちたまうなり光の国に

和美さんに道をと詠いくれし地の奇しき縁に道を示さる

ふり返りたどるわが生の艱難に必ず入り來し神の手のあり

ジユスト右近通のぞめるみ國ありわれも入りたきいつかその門

つづましき來し方しのぶ野邊送り雪はあえかに降りてまた消ゆ  
陀羅尼助の看板くすむ軒下にはや飛来せよ今年のツバメ  
忘らるる記憶めざめよ息ためてふうと吐きだす木蓮白し  
花散らす口絆坂の風にのる背さびしきオダサクの影  
降りやまぬ五月の空の青しずく森林軌道に踏みいりて聞く  
黒い雨の記憶あらたに千年を生きながらえよ二羽の折り鶴  
浜田さんが五分遅れて来てくれそうな月例歌会の戸外は晴れて

## 高 津 砂 千 子

海

・ 風

寒き日の続きたつぶり陽を浴みて切り干し大根かおりよろしき  
ひと夜さの雨に散りたる雪やなぎ地に大輪の花を描きぬ  
手放すと決めていいのか自らに問いつつくぐる新緑の門  
十キロの梅ていねいに漬けこみぬあの人この人思いうかべて  
降る雨にアガパンサスはむらさきの泪となりて雨つぶこぼす  
音訳の发声練習日に幾度腹の底からアエイウエオアオ  
元就が嵐の夜に船出ししここなりとぞ海風さわたる

## 高 橋 和 代

咲きゆくさま

・ 桃

乗り入れの許さるうちにと桜の山ゆるり巡りぬほころび初むる  
開花にはきびしき寒さ要るといふ蕾は裡にて測りるるらし  
散るのみにあらぬ桜のいさきよさ裡に耐へ来て咲きゆくさま  
いさきよき散りきは見むと年どしの桜並木を訪ねめぐりし  
季ごとに桜狂ひをしたりしがまたの年もと願はぬは無き  
年ごとに連れ立つ人の減りひとり桜にひたる思ひのままに  
独りなる桜見を哀れみくるるがに思はぬ雨に阻まれしことも

## 竹下妙子

篤き想ひ

・霧

## 辻彌生

泉の笛

・春

消えがたになりし韓國の峰の雪朝けに見ればまた新しき  
高空の半月青し届かざる光は宙の何処を照らす  
春くれと傷つきし驚の飛翔なく遅れ旅立つ鳥もあらむか  
ほの蒼き紺を曳きて飛び闇に消ゆ虫よ闇の何に恋ひる  
白百合の固き蕾の筒先は惑へる吾を射程となせり  
何故に見えざるものに和して鳴く滝となりつつ蟬しぐれ降る  
桜として征きたる兄も花びらの筏に乗りて還る八月

## 田土成彦 余韻

・宙

## 塔原武夫

草の歌

・湾

愛石寺一千三百年の盛衰の一時を訪ふ何のえにしそ  
まれまれに人來てならず鐘の音の余韻は空に木魂するなし  
東大寺の鷗尾の高さをやんはりと春宵の闇が包みゆくなり  
春宵をつきつき過ぐる松明の十を数へて今日を終はりぬ  
関子さんと呼べど返事の返るなし面輪うつくし極のなかに  
笑顔よしあくばのやうな君の歌いまさらながら読めばせつなし  
純白にあらねど淨き白さにて月光菩薩の合はすもろの手

## 田土成彦

無念の春

・宙

## 虎谷信子

名張さん

・伴

霧雨の上がりし修二会耀きをみせて夜景のひそかなりけり  
大屋根に届かんとする焰あげ松明燃ゆる二月堂明かし  
霧雨にぬぐわれゆきし奈良の街回廊はるか瞬きて見ゆ  
苦しみを解かれし君がたましいはさまよいあらん遠夜のいまを  
思慮深き人ゆえ重き苦しみに耐えていく月この冬の尽  
電話より聞こゆる声のくぐもれば病の重さおのぞと知れり  
崇高とも己を律し息絶えしきみの無念の春は逝きたり

離りるしままの 友の計きく朝。ただ悲しくて 独りぼつ念  
化粧地蔵まつり日 祈らむ友のため、子ら導きこし 一生なりせば  
「名張さん覚えていますか」ガリ版で初めての歌集あすか作りし事  
女学校とふさやけき学び舎 師につきて、共に歌詠む 青春の日日  
ニユータウン桜満開 まねかれて、美酒たしなむ君ほがらほがらと  
今は唯安らかにあれ ここ世にて、終焉の日日 イロウとぞ知る  
地蔵盆 さざめく子らの声もなく れんげ田蝶まぶ群も まぼろし

## ●地中海叢書一覧 ● (101五・一・101六・10刊行)

桜葉のくれなる深き一枚が目の前に落つ護符のごとくに

病室の孫にケーキを切り分けて共に食みたりクリスマス・イヴ

唄ぎわたる東京湾のきらら背に病みる孫と影を並べる

手づくりの煮染をかこみ孫かこみ食べつくしたり正月一日

梅林の黄葉まばゆき湯治宿

田沢湖田沢字国有林

編笠のやうな革のスープ椀きのこキノコに六腑の足らふ

小春日に艶もつ殊実ねばたまは此の頃にぶきわが目を覚ます

## 中島義雄

音

岡

小さな盆踊りの輪が散りゆけば銀河が静かな光りを戻す

下校急ぐ児童らの列乱れみだれダム放水のサイレン響く

颶風は洋上に去り鰻屋の鰻焼く火が裏戸より見ゆ

風去りぬ水は足りたり生きめやも妻の退院の手続きにゆく

涸れ果てし詩蘿探りてさまよへば人は雪中に蓮根を掘る

親を殺めし高校生が曳かれゆき裂けたる間を雪が縋る

思考なべて喪ふごとく雪しまき生きゐる鐵の蹄を刺るなり

## 久我田鶴子

はじまりの夜 羊

かがみこみ呪詛にも似たる祈りする時節の雨よあたたかく降れ

こぼれだす黒曜石のひかりなり遠き記憶の傷が主張す

あれはさう悲鳴にありし いづくにも向け得ざるものほどぱりたり

白き花ばかりを選りてそばに置くきのふのすみれふのたんぽば

おびやかす存在でもあるわたくしはやどかりの殻とほく見てゐる

どこにでもある不安なりベンに書く文字をゆがめてブルーブラック

月のうへに金星が乗る はじめの夜をきよめて東の灯火

松永智子歌集『川の音』(第882篇) 本阿弥書店 二七〇〇円+税

玉井綾子歌集『発酵』(第891篇) ながらみ書房 二五〇〇円+税

酒井 牧歌集『咲いくつも』(第892篇) 九曜書林

宮崎 功歌集『虹三重』(第893篇) 久我田鶴子歌集『菜種梅雨』(第894篇)

砂子屋書房 二〇〇〇円+税

田土才恵歌集『風のことづて』(第895篇) ながらみ書房 一五〇〇円+税

梅本武義歌集『仮眠室の鳩』(第896篇) ながらみ書房 一四〇〇円+税

小宮山玉江歌集『葡萄棚の下で』(第897篇) ながらみ書房 一四〇〇円+税

浜谷久子歌集『風笛』(第898篇) ながらみ書房 一五〇〇円+税

上石幸子歌集『母の子守唄』(第899篇) ながらみ書房 一四〇〇円+税

『香川進研究Ⅱ』(第900篇) ながらみ書房 一四〇〇円+税

大浪美雪歌集『鯨の道』(第901篇) ながらみ書房 一五〇〇円+税

上林節江歌集『絆』(第902篇) ながらみ書房 一八〇〇円+税

神田鈴子歌集『春の蝶』(第903篇) 青磁社 二五〇〇円+税

\*『香川進研究Ⅱ』のご注文は、本社宛に葉書でご連絡ください。

\*歌集についてのお問い合わせは著者に直接お願ひします。

## 船田敦弘 作品三十首

船田清子・選

### ・平城讃歌

たましひが政<sup>まつりごと</sup>治なすこそゑ嚴かにおごそかに届く黒き地平ゆ  
びるしやな仏の半眼のまみの注がれて灯籠にとほき飛天の樂<sup>ゆ</sup><sub>(〃)</sub>  
ブッダガヤの菩提樹下なる足<sup>そくせき</sup>石の請來しあればブッダがにほふ  
遷都祭へ樓門復興果たすべく平成九年槌音せはし

(東大寺)  
(喜光寺)

鉢なべて円きこころに蓮<sup>はちす</sup>盛る七月二日行基の喜光寺

(〃)

正面の合掌の一臂よりたつひかり釈迦の守護神のさまにかがよふ  
阿修羅神の履ける板草履に驚きぬインドの僧の付けるしものぞ

(興福寺)  
(〃)

梵語なるアスラが語源の阿修羅とふ生命<sup>アス</sup>をたたする若きかほばせ

(〃)

薬師寺の東塔解体修理なるは十年後といふ黄泉平坂

(薬師寺)  
(〃)

東塔と西塔のあひに若草山納まりたれば薬師寺やさし

(〃)

矢田寺の庭なる沙羅の根かたにし落つる花ありブツダ憶へば

(矢田寺)  
(秋篠寺)

本尊は薬師にませどしかすがに伎芸天に額づく歌の子われは

(平城京)

遷都祭近づく宮居の空ゆ降るヒーチブリートルリトルリートル

揚州の和上の里より贈られし瓊花<sup>けいくわ</sup>の白き薰風さはやか

(唐招提寺)

